茉優の日記

目次

一、茉優の日記　二
二、あの人と島さんと佐藤さん　一一
三、会社でエッチ　二二
四、海へ　三一

一、茉優の日記

「あっ……ん……あ、あん」

左手で胸を揉み始めると、すぐに乳首が勃つのが分かった。服の上から揉みしだき、だんだん激しくしていく。右の胸もゆさゆさ揺らし、男の声を妄想する。

『感じるんだろ？』

「そん、な……や、あ……ああっ」

『体は嫌がってないぜ。よく見せてくれよ』

「あ、だめぇ……」

ベッドがきしむくらい身もだえし、抵抗している自分を想像する。ニットの裾を捲り、ブラに手を伸ばす。右手は太腿をさすり、徐々に足を開いていく。ブラを無理やりずらされたのを想像し、興奮する。

「やっ……いやあっだめ……」

下半身が熱い。もう濡れてきているのが分かる。クリトリスが膨らんで来ているのも、触らなくても分かる。パンティにはもう染みができているだろう。

『腰が動いてるじゃないか……イイんだろう？』

妄想の中の男は、茉優の体を撫で回し、後ろから服をたくし上げてブラをほとんど外してしまい、露わになったCカップの胸を好きなようにしている。固く勃ちあがった乳首をつまみ、弾き、痛いほどに引っ張り、茉優を言葉でも責めていく。

「あんっ……乳首だめぇ……ハアハア」

『だめじゃないだろ……こうされたかったんだろ？無理やりされるの想像していつもオナニーしてんだろ？』

「そんなぁ……あんっあはぁんっ」

男は、茉優の腰を掴み、股間を押し付けて前後させる。その怒張がこれから自分を突き上げるのだと思うと、たまらなく興奮する。クリトリスが脈打っている。奥から愛液が溢れて止まらない。

「いい……乳首イイ……胸、いじめてください……もっとっ」

言ってしまった。この男に、一体これからどんなことをされてしまうのだろう。自分で乳首を引っ張り、上をすべて脱ぎ去り、両手で激しく胸を揉みしだく。それだけでは足りなくて、寝室の壁に取り付けた大きな鏡に向かう。髪を乱し、上半身は何もつけず、

スカートも半分脱ぎかけている女が、口を半開きにし、自ら愛撫する形の良い胸を見せつけている。

『ははっ、思った通りの淫乱だな。ほら、鏡見てみろよ。いやらしい顔して……ここももう濡れてるんだろ？』

妄想の男は、茉優を鏡に向かわせ、スカートをまくり上げる。ストッキングの上から、ぐい、とアソコに指を突き立てられ、茉優はもうどうなってもいいと思った。

「アンッ……あ、や……ああんっ」

ベッドの上に膝立ちになり、妄想の通りに指を突き立てる。『男』の手はストッキングを破り、パンティの染みがはっきりと見えるようになってしまった。

「いやあっ……」

もっとされたいのに、抵抗する自分にもたまらなく興奮する。『男』もそんな茉優に舌なめずりしている。ストッキングの穴からパンティの染みをなぞり、擦り始める。その指が突起を探し当てた。

「あぁん……ふぅうん……はあはあ」

『気持ちいいよな？』

「は……い……気持ちいいですぅ」
『男』の手が無遠慮に、パンティの中に入ってくる。
『ぐしょぐしょだな』
愛液を指に絡め、浅く差し入れ、指の腹でクリトリスを強弱をつけて擦る。
「あぁんっ……いいっ……」
茉優にはもう理性など残っていない。この『男』に滅茶苦茶にされたい。半開きの口からはみ出した舌がちろちろと動く。アレが欲しい。舐めろと命令されたい。恥ずかしい恰好で何度も出し入れされて、中出しされたい。『男』の指は、クリトリスを小刻みに震わせ、かと思うと浅く深く絶妙な動きで出入りしている。
『いやらしい顔だな……最高だ』
もう抵抗しないと見たのだろう、『男』は全裸になり、茉優の下着も使い物にならなくなったストッキングと共にずり下ろす。そそり立ったペニスを見せつけ、命じる。
『舐めろ。しゃぶりたくてたまらないって顔してるぜ』
その言葉に、茉優は声もなく従う。舐めたい。四つん這いになるよう命じられ、自分は男の顔の前に下半身をさらけ出す。ペニスに口を近づけていき、舐めながら咥え込ん

でいく。
「んぅ……んっぅ……はあはあ」
睾丸をさすりながら、竿をねっとりと舐め、亀頭を飴のようにぺろぺろとしゃぶる。口が届かない部分は手でこすり、鈴口は舌先で愛撫していく。
『うっ……はあはあ……うまいな……やばいなこれは』
よがる『男』の声が嬉しくてならない。じゅぽじゅぽと口でしごく。『男』の指はあそこをなぞり、もどかしくて腰を突き出せば、むしゃぶりつかれ舌で蹂躙される。
茉優の妄想は暴走していく。鏡の前で四つん這いになり、大きなペニスを咥えているつもりで舌をうごめかす。あそこを見られ、舐められているつもりで腰を揺らす。鏡にあそこを映してみれば、ぬらぬらとてかり、ひくひく動いている。自分の痴態を録画しているスマホに向かって、いやらしい顔をしてみせ、あそこを大きく映し出す。指を一本、二本と入れ、激しく出し入れする様を、スマホが記録していく。
「んぅ、はぅうん……はあはあ……気持ちいい」
『俺も気持ちいいぜ……今までで最高のフェラだ』
『男』は茉優が勘違いしそうなほど優しい声になったが、指はすでに二本突き立てられ、

まるでもう何度も茉優を犯したことがあるように、イイところをこすっている。
「あんっあんっ……」
指が三本になり、中でバラバラに動かされると、もうだめだった。自ら腰を振り、ペニスをしゃぶることもできず、かろうじて手は竿を力なく握っている。
「あんあんっ……もう欲しいぃ」
『何が欲しいんだ？言ってみろよ』
「やぁ、いじわるぅ……あぁぁっ」
『中、締まったぜ……イっちまったんじゃないか？ほら、何が欲しいんだ？』
指は激しく出し入れされ、絶頂に達した茉優の敏感な体をさらに貶めていく。
「あ、やぁ……そこぉ、おちんちん欲しいのぉっ」
『どこに欲しいんだ？言わないとこのままだ』
「やぁん……オマンコに、茉優のオマンコにくださいぃっ……ぶっといおちんちんぶち込んでっ」
四つん這いのまま、腰をつかまれ、ぬるぬると先っぽをこすりつけられる。
「あぁん、はやくぅ」

『我慢できないのか？ったくとんだ淫乱だ……』
ぐい、と押し入ってくるそれは、一気に茉優の奥まで届いた。
「あーっ……あん、あんっ、あんっ……」
緩やかに、かと思うと激しく、茉優の体を知り抜いているかのようにストロークが繰り返され、下から回された手が胸を揉みしだく。こうされたかった、こんな風に犯されたかった！
「ああん、ああん、気持いいぃ」
『犯されてよがって、淫乱だよな。私は淫乱ですって言えよ』
「あんあんっ……私は淫乱ですぅ……はあぁんっ、いいっ」
『淫乱オマンコにちんちん挿れてよがってます、ほら言え』
後ろに抱き起こされ、妄想の『男』は、茉優を座位で突き上げる。そのすべてが鏡に映し出され、茉優は完全に『男』の欲望の虜となっている。
「淫乱、あっあっ……淫乱オマンコに、あはあんっ、ちんちん挿れてよがってますうっ」
『いやらしいこと言わされて締まるんだなっ』
「あんっ、ああんもっとぉ……」

茉優は明るい部屋の中、自分で指を出し入れし、クリトリスを嬲り、鏡に乳房をこすりつけ、舌を出して鏡の中の自分のそれと絡める。妄想の中の自分よりも現実の自分の方がいやらしいのではないか。ああ誰かもっともっと私をいやらしくして、この体を好きにして……。

『俺が毎日抱いてやるよっ……はあはあ……もっと教え込んでやる……いいなっ』

「毎日抱いてください……ああっ……もうイクぅっ」

『はあはあはあっ……いくぞ、中に出してやるっ』

「出してっ中っ……あ……あああああっ」

『うっ……』

自分の体がガクガクと大きく跳ね、脳天を快感が貫く。『男』は茉優の中で射精し、塗り込めるようにぐいぐいとなおも腰を押し付け、イっている最中の茉優のクリトリスをこねまわす。

「あんっ……またイっちゃうっ」

『何度でもいけよ。あんたの体は今日から俺のものだ。いいな』

「はあはあはあ……」

指を動かし続け、三連続でイった茉優は、ようやく動きを止めた。気持ち良かった。あそこは、じんわりと熱くて、充実感がある。オナニーをした後に特有の後ろめたさは、最近ではもう感じない。もっと、もっとと自分の体を開発したい思いが強い。今日はこんなにイけた。明日はもっと感じる体になるだろう。性欲に正直になって、自分をかわいがって、自分に触れる男をメロメロにしてあげたい。ああ、セックスしたいなあ。

部屋の中を見回す。鏡は自分の息でところどころ曇り、唾液や愛液が付着している。乱れたベッドの上には、パンティと破れたストッキング。ニットのツーピースは丸めて床に落とされ、ブラもベッドから落ちかけている。自分の移動に合わせて向きを変えてきたスマホは、まだ録画を続けている。熱が収まらない茉優は、スマホの画面をじっと見つめ、その前でまた胸を揉み始めた。

二、あの人と島さんと佐藤さん

茉優は、これまでに自分に興味を示した男を次々に思い浮かべていく。

中学の時、好きだ、って言ってきた高校生。今思えば、あの人、わたしとエッチしたかったのかなあ。しとけばよかったかなあ。通学中に会うときも、あの人のバイト先で会うときも、わたしをそういう目でみて、あそこを大きくしてたりとか？告白されたとき、いきなり抱きしめられたけど、あのとき逃げなかったら、押し倒されてたかも？同級生は「あの人かっこいいよねー！」って騒いでた。でも付き合ってたらわたし、十五歳でエッチしてたかもしれないんだ。

あと、その前。ずーっと前。まだ十歳にもならない頃に、高校生か大学生くらいの人に、何も隠れるところのない道端で、触られて。わけもわからず下着に手を入れられて、濡れてもいないのに指、入れられたっけ。何をされてるのかわからなかったけど、最近、ひとりエッチするとき、あの人の指、思い出すんだよね……。この前、すっごく気持ち

いいいとこがあって、あの時に触られたのと同じ感覚だった。それって、あの人は私を感じさせてくれたってこと。痛い、ってわたしは言って、それでもやめてくれなくて、だけど今思うと……エッチがうまい人だったのかも。この頃、あの人の指を思い出しながらシテる。今頃、素敵なおじさまになってたりしないかなあ。

「はじめまして」

「うん、よろしくお願いしますね」

ネットで募集していたお見合いパーティは、けっこう賑やかで、男女ともおしゃれな人が多い。それだけでも、来てよかったと思った。会社の、島さんのことは、気になるけど……本気のわけない。遊びだよ。だから、こっちが本気になっちゃだめ。今日は、いい出会いがあるといいな！

そう思って会場内を眺めていたら、わたしをじっと見ている人がいて。年はけっこう上だと思う。落ち着いた雰囲気の、ちょっといいなっていうおじさま。このパーティの年齢層は広くて、わたしも十五歳前後までなら年上ＯＫにしてある。私の方に向かって歩いてきて、「こんにちは」って言うときもわたしから目をそらさなくて。何だかドキッ

とした。で、ちょっとお話ししてみることにした。
「わたし、こういうの初めてなんです。緊張しちゃって」
「わたしは何回か……三回目になるのかな、それでも慣れるものではありませんよ。初対面の人ばかりですからね」
「そう、ですよね。そう言っていただけると、何かホッとします」
彼は、親し気だけど失礼じゃない目で、やわらかく微笑んだ。わ、素敵。え、ドキドキした。顔に出てないかな。
「あなたのような人なら、こんなところに来なくても良さそうだけどね」
「お世辞はいいですよ……その、あなたも」
「佐藤と言います。佐藤俊平」
「あ、わたしは……茉優。下の名前が茉優、です」
「あとで、フルネームを教えてもらえるように頑張りますよ」
「あ、ごめんなさい」
ずっとドキドキしてる……何で？
「ははは、謝ることはありませんよ。このまま楽しく話しましょう。ね？」

「は、はい」
優しいな～。もてそうなのに、三回も来てるなんて、理想が高いんだろうな。いいや、今、この会話を楽しめれば。
「こういう場所での会話は、お互いを探りながらだから、どうしても内容が浅くなるし、よそよそしくなりがちだ。どうです？いっそのこと、お付き合いできた場合のことを想像して勝手なことを言い合うのは」
「え、何ですかそれ。楽しそう！」
「そうだなあ、例えば」
佐藤さんは、わたしに半歩近づいてきて、耳元で囁いた。
「次の休み、どこに行きたい？茉優」
んっ……やばい、この人の声。クル……。
「え、えっと、佐藤さんはどこに？」
「茉優が行きたいところに、わたしも行きたいな」
そんな優しい目で見つめないでください……。ううん、これはお芝居みたいなものだもんね。それこそ、本気にしちゃだめ。

「じゃ、じゃあ、海とか……」
「いいね。海の見えるホテルを取っておくよ」
「えっ……」
そんなの失礼だ、って怒っていいところだったかもしれないのに。佐藤さんの顔を見たまま、何も言えなくなった。顔、赤くなってる、絶対。佐藤さんの顔から、さっきまでの笑顔が消えて……そんな目で、見られたら。わたし。冗談なんでしょ？早く笑い飛ばしてよ。ごめんごめん、って。ねえ、そうでしょ、佐藤さん……。

「はい、皆さーん！それではこれからマッチングのお時間となりまーす！気に入ったお相手は見つかりましたか？番号を、間違えずに書いてくださいね。いいですか？間違えずにですよ！」
スタッフが念を押して、会場のみんながどっと笑った。だけどわたしと佐藤さんは、動かず、声も出さなかった。
そのとき、佐藤さんの電話が鳴った。失礼、と言って電話を取り出す間も、私から目を離さない。金縛りにあったみたいに、動けないよ……。

「何だ、気がきかない奴だな」
佐藤さんは電話に出ず、相手の名前だけ見て、またポケットに入れた。
「いいんですか？」
やっと声が出た。
「うん、ここを出てからかけなおしますよ。だが、残念です。わたしはもう行かないと。せっかく会えたのにな」
「え……」
行っちゃう、んだ。それっきり、佐藤さんは会場を出ていってしまった。マッチングの時間になったけど、ほかの人とはほとんど話してないし、適当に番号を書いたりするのかなあ、こういうときって。
だけどわたしは、佐藤さんの番号を書いた。五番。いなくても、わたしが選んだのはこの人です、って。これならだれにも迷惑かからないよね？
その後の、カップルが成立したかどうかをもったいぶって発表する時間は、いても仕方ないから帰ろうと思ったぐらいだった。
「では次です！二三番の女性の方！」

二三番。私だ。誰かが書いてくれたみたいだけど、困るなあ。だってもうわたしは、佐藤さんのことで頭がいっぱいで……体も、けっこうやばいから。早く帰ってひとりでシて、発散するんだから。

「二三番の女性を選んだのは、五番の男性です！」

わーっと会場がざわめく。え？というわたしの顔に、二三番なんだと気づいた周りの人たちが、拍手してくれる。

「え、でも」

反応に困っていると、司会者の言葉が続いた。

「二三番の女性にお相手の男性からメッセージが届いております。所用でどうしても退出しなければならないと本当に残念がっていらっしゃいましたよ。お帰りの際、受付にお声がけください！」

「は、はい」

急いでたみたいなのに、佐藤さん。メッセージって何だろ？帰り仕度をして受付に行くと、スタッフの女性がにこにこして紙を渡してくれた。

「二三番の沖田様ですね。本日はありがとうございました。五番の佐藤様より、こちら

をお預かりしております」
「ありがとうございます。すみません」
「いえいえ。カップル成立、おめでとうございます！ご交際がうまくいきますよう、スタッフ一同心からお祈りしております」
「はい！」
明るい気持ちになって、その紙は大事にしまって、家に着くまで見なかった。見たら、夢がさめてしまいそうだから。家に着いて、荷物を置いても、まだ見たくなくて。もうちょっと、この夢にひたっていたいと思った。……今日は、お風呂でシよ。
お風呂のお湯をためながら、服を脱ぐ。脱衣所と洗面所を兼ねたところに鏡があるから、この時間はここで、ちょっとだけ。
全裸になった自分を、鏡に写す。乳房の形は、いい方だと思う。ツン、と尖った乳首は感じやすくて、……島さんは、きれいなおっぱいだね、って言ってくれる、いつも……。オナニーばっかりしてたわたしが、この間の出張のときから、島さんと何度も……だけど今は、佐藤さんのことを考えたい。どんな風にわたしを抱くんだろう？って、思い描いていく。乳房を揉む自分を鏡に写して、乳首をこりこりいじって、感じてる顔を自分

でじっと見る。舌を出して、おちんちんをしゃぶってるみたいに動かす。
「あっん……おっきい……はあはあ」
海が見えるホテル、で。抱いてくれる？佐藤さん。
「んっ……気持ちいい」
右手でクリトリスを触ると、もう大きくふくらんでて……たぶん、会場からずっとこうなってた。
「あ、ん……いじって……触ってえ」
オマンコは、もうぐしょぐしょ。
「佐藤さん……あっ、ああっ」
いつもより、イクのが早い。興奮してる……。
「はあ、はあ……」
お湯がすっかり、たまってる。浴室に移動して、軽く洗って……それも自分でいやらしく触りながら。お風呂場の床に四つん這いになって、お尻を突き出して、あそこを洗う。
「あ、あん……佐藤さぁん……あふれてきちゃうぅ」

泡と愛液が混じってもどかしいけど、奥からどんどんあふれてきて止まらない。佐藤さんのこと、考えてるからなの？

「あん、そこ……はい、気持ちいいですぅ……もっと触ってぇ」

いやらしいことを言わされてるつもりになって、お尻を振る。佐藤さんは、お尻をぺちんと叩いたりするのかなあ。島さんは、優しいのにＳ入ってる感じだけど……。

「ああん……ああん」

体勢を変えて、壁にもたれかかって座り、目の前にいる人にあそこを見せつけるみたいにして、指を挿れていく。

「見てください……わたしの、あっあっエッチなとこ……」

クリがぷっくりふくらんで、１本の指じゃ愛撫しきれない。オマンコは、指をすーっと飲み込んでいく。

「あーんっ……」

出し入れして、中の壁をこするうち、痛いと勘違いするくらいに鋭い快感を得られる場所を見つける。ここ、好き……。

「あっあっあっ、そこ、いい……佐藤さあん」

島さんに教え込まれていく体を、佐藤さんを想いながらいじめていく。それなのに……。
「あん、あはあん……」
『大丈夫だよ……ね、お願いだから』
「！あ、あああっ……」
指がめちゃくちゃに早く動く。乳房を揉みしだく。頭の中、真っ白になってく……。
オーガズムに達した私がその瞬間思ったのは、幼い私に快感を教えた、あの人だった。